特41
119

西生先生戯述
獺角下の谷
東京　四望舎蔵

序

看書倦来眼氣朦朧燈火を春宵の月の如し頭を垂れ弧曲れり倚て眠れば夢魂郊外に出て月中に歩し草花露を含み咲誇り微風袖を拂つて香ぐ時に傍に物有り頭を廻らし看るに兎と狸なり各人語を做し談話喧々歐洲の議事院に國務を論ずるが如し僕

狸の面白

東京　四望堂書房

119
看書
頭と垂

序

僕来眼氣朦朧燈火を春宵の月の如く
脇に曲れり倚て眠れば夢魂郊外
に出て月中に歩し草花露を咲誇り微
風袖を拂つて香ぐ時は傍に物有り頭に
廻らし看れば兎と狸なり各人語を做し談話
喧々歐洲の議事院は國務を論ずるが如し僕

身を潜め耳を聳て変幻鬼狸の議論倍盛んなるに驚き夢先覚さり然ども其聞ゆるところ耳目に残り現在の如し毫を取り言ふる侭を記すに一冊子の形状を為に因りて是を梓る上一月下旬答と題し童子の小学日課の餘力蜻蛉はるる代んとして其文おもの論元来鬼と狸となり看官鄙陋を咎めるなかれ僕ハあらぬ知らぬとまうして

竹根稚子寸々伸る時　政和志留寿

目録

○狸鬼を謀つて身を賣せんとす

○鬼蝕をして己の黨の世に挙らるを欲ず

○狸己を誇りて鬼の痴をあざける

○鬼我性と狸の性を論じ

○鬼鴞の勦を逃せしを拙して人の慾を論じ

○鬼大いふ狸の性とする

○狸本朝と西洋の往昔を引て鬼を論破す

○鬼象の陰嚢と狸ふつけ猪の耳を鬼ふ附る

往ちぐひを示し

○鬼日本と歐羅巴の古今を論じて狸を説く

○狸閑口鬼月下ふ唄ふ

通計十一條

東京 木生政和 戯述

○天晴月朗明ふして風静ふ白露むすぶ千草の花い恰も錦を敷きたる如き野末の眺望閑雅を極め最愛すべき夜なりけるに鬼い獨り芝生の青きを茵となし月ふ照らされて打仰向徐念なくとなえ

うけを愛ふまさに寂莫たる景色ふ乗じ何が
る一ト狂言して楽しうんと有漏を来めるる磯端の
狸あり一群繁まる芒の蔭より差覗くふ耳の長さ
一尺四五寸黒白黄の三毛ふして班まるり美しき大猫
巻と名くる兎月を眺望て居るうけまで狸忽地
舌嘗ずりして思ふ世ふい不思議なる上玉も
有るものるる是まで代四辺ふて見るりしを定め
て外国より来りしものるうん今彼奴を偽して人間
の手ふ賣渡さば僧ハ望ふ任すべし我が黨ふる幾
林寺のぶんぶくが鍋の茶釜とさ人羨ま言ゃせり然る
を僕いふの倖福ふりて黄金の茶釜と成るも難る
まじと忽ち彼の磯端の兄貴ぶぶん引心とるりとの
兎をそのうし人間の手ふ賣金もうけとるさ
んと思ひけるゆえ媚りて声ふて「月ハ東山の上より出
て斗牛の間ふ徘徊すと聞かりの前赤壁を吟じ
るがら徐々叢を出うけ初めて兎を見つけて振りふて

嗚呼殆いうる殆しとの習ふい狼あり虎あり芝生
ふ安居しく月下の草花を愛しるふを兎君あらず
や何とく猛悪なる虎狼のくあふ捕ふと彼らが餌
じきとなるうんとをなるる思ふふ君い君子国乃地
と未ざ不案内と見清らう英吉利う仏蘭西う或い
亜米理加の合衆国ようや渡米ふるト心切ごうしふ
出所と正しいよ〜恵賣とするさんとする兎い出づうふ
狸とかへうん是い誰ならんと思ひしふ狸君ありしや

僕いこれ外国の者ならす
大日本武蔵野の産ふく
當時白山神社の氏子なり
本草綱目ふ兎雄るく八月
十五夜ふ月の中の兎と見
く孕む或ふい兎い明月の
精をうと書う故人何
因りてかかる故るき説と

そもそもや僕是らのことを思ひ月ふ對して更問うと
も忘れ居らうと答へけるに理妙しく心中ふおどろき
け奴外国生とさらせりふ豈そうらんや白山神社乃
氏子ならんとい然るにども本草綱目をぞと引く議
論とそんとなるとうるとび屈化ふ遠き愚鈍性と察
せるるまうしく甘口を以てちまうまうさび我ごろの中の
玉うさぎとるんいうかうずと思案し聞ずや君らま
ん身が黨世ふあげうるとて全盛一昨々年の家ふ倍す
うと以て世の人是とあうふと臣の君ふつふまうるが如く
孝子の親ふかしづくが如しあるひい妻妾と愛し子と
するうり厚きが故ふ食ふい豆腐屋の仕出しあり居
間い指物屋が新造営美るり病痾あるとび醫師と招
ひて是を療治し出るときい細代の籠乗りのふあす実
ふ王公の境堺るり我が黨いがきく獣類るるりの一うて
羨やまざるるし然るを君ふい古今ふ対の良王ふ有
あるら斯る草むらふ身を隠しうるづうふ月輪の日光

と返射するとなん楽しとするい奥ぞ除うふ因猶
ふすぐるるらずや傳へ耳く法蘭西の拿破崙い羅
馬の該撒「マセドンの歴山王ゞ世界を震動るせしと
慕ひ猶幼稚より我も剣と横〻天下と横行せん
と云ひ又合衆国の華盛頓も童子より大志ありしゆえ
とゆく母馬里ゞ諫のことも耳らをず世ふ出らり
者ふあらずや僕今君と見るふ拿破崙華盛頓ふ過
くるを遠〻孔明南陽の草廬ふありて劉備ゝ三顧

の雪の道迂遠る例と待んゝまやうふ世ふ沢ふ
我とそ地球上の一品るまと天下と横行るーるるたゞ
他のさめ亦ん身のさめいざく思ひ立べきるり僕僥倖
ふうき士と知まり推挙るさんと扇動ゝけまら兎い
頭と左右へ振り否まらず君ゞ言ぞ大らふ違へり
僕らゞ輩い者と以て世ふ挙らるりのふあらず只見るる
とりの色ふまり人の色ーと請るりのゝ色と以て
請るりのい仮令一さん寵るも幾許るらずまく捨ら

るゝ祇王祇女佛御前常盤の美人らぶ清盛の寵愛ふ
かけるが如し然まども色と賣りのい力ゑゝて世のふ
ふ預るゝゝ易うべし信頼その器ふあらずして用ひ
最重きふゝ終ふ平治の乱と引出し法榮西十六世
路易王性善良とゝども才足らず故ふ一大騒乱乃
基ひと罪きゝるふあらずすや僕い僕が愚と守らんのゝ何
そ傾城花女の如く色と賣り媚とあきるい身と箱住
居の究屈もあすとと求めんやと言けるゝ理い耳く

いい奴とても我が偽謀ふかるべきならずと思ひけるゆえ
ゝもち本正と祝ひて嘲う笑ひ実ふ君が説のごく
兎連中とゝるふ何の能あると云ふと知らず然して耳
長く豆まゝ長きい造物者の滑稽うらぶし出来そと
るいう物と食糞とまゝび床の間の置りのふもるらす
木の芽と摘ゝ花とあらせび庭のるゞめふもゝ雑し
かるゝ益の、躍りのへ千圓万圓の黄金と費し左が
自ら万物の美るゞ誇る人間の愚笑ふべし人実ふ万

物の異くらべ異ぞ僕等と
色せざる夫僕らが能い昼間
見しを有まべ夜ことに
服装とうちく風ふ遠近の調
べと尽し大入道と変じて雨
ふ往来の人と驚うす狸寐
らい花街の客の用ゐる
ところ狸の皮い渦金いけが

豪篇ふ尊とし殊ふ僕らが陰嚢の自在なる是と肩ふ
すべ布代衣和尚が代衣の如くことと脊負い熊谷敦盛
が出陣の風呂ふ似くり雨降べ笠とるし産するときふい
菌とゐす詩ふ云ゝ狸の澳と瞻まべ茉竹猗猗くう
秦誓ふ曰断々くして狸なし孔子も我が黨と讃し
て斯の如し実ふ獣中の智者とらべし如何ふ耳長
先生然ふあらずやと誇りかけまべ鬼い脊中の丸と
と正し首と擡げて言ひるゆう君が説の如く僕らが

獸中の遲鈍にして且柔弱なり故に人間僕らが
黨とよびて鳥の如に扱ひ一羽二羽とらふるもの是
につき其説さまざまあり徳川氏の祖先世良田有親
同親氏流浪して信州深志の城にさまよひ林光政が
家に寄留す時に永享十二年庚子年正月元日
光政ぐうう兎を山中に狩りえて来り羹となして
両君を饗すとあり徳川家次第に冠運ひかもむ
きーと以て後世に至るまで吉例の吸ものとなす然
もども本朝に近来まで獸を食ふことを禁ず故に
僕らが輩を鳥に比へて一羽二羽とよぶとも言りまで
草網目に熒惑星明亮るらぶぶ則雉兎を生とあ
り是に因り一羽二羽と云ふとも云りまで同書に鬼潦
と以て鼈とあり鼈旱と以て兎とあり実に然る
や否やい知らずまで宋史に曰王者德盛んなれば
赤き兎現ずと王者者老と敬まれば白き兎現ずと
或ひい漢醫い兎の腦髓ともつて催生の神藥とな

鬼の血と痘瘡の良剤と尊ひ支那ハ人ハ鬼と以て食品の
上味とする然ども今僕らが輩の世ハ上らとて
三毛ト耳長ト奔走さるハ聊ともらの故ハあらず
我が黨ハ性愚鈍なると以てこるく分と守ることと知る
仮令ば耳敏くして能数十丁の外のことを聞得るとも
どもと惜んく物と言とる方今奢侈の世美味
珍膳あくるハ山の如くなるも豆腐の製し売ともて
上食とし餘ハ木の芽草の葉ハ服と賑らし敢へて

奢沢なるのぞこと起さず冬ハ日當りとかつし夏ハ涼処を
求む只良夜ハ月の朗明なると見ると上るき歓楽と
す然ども耳利けども只りの言ず身富貴なるも居
とをつせず人の寵とをもむるも食とのぞまず僕らハ
僕らが請得る性を保ち分と守り怖りて他と
ねらざる是その人間ハ色とかうむる所謂なり然
ども今の侍を見るハ能の僕らが黨として寵
愛分ハ過ぐれば後ハ為らず僕らが黨の汚名とな

故なき罪をかうむらんと獨り嗟歎ふことえず居そう其故い世衰今王政復古一大壹華の秋ふ當り国中の武士をたゞめ夫ふ出入りする用達町人或ひい刀劍商人刀劍職人きゝい札差諸拵民などゝ我が産業の薄きを以て士い商法を冥かんこゝ衰微の工商い其世営を替んとすもどゝも是きゝ容易ふ有らざれど何をゞると心を痛め工ふうを費ゝ居る折ふら豕の崩もの鬼の養ひ初きいゞゝふ一二分の金の

儲けもを数かゝらず然らば我らも内職のその内職ふ生育てりんと一人をと出ゝ二人をと出ゝ渡る人ふ拵れて鬼い追々高くなり儲の殖るふをゞひて商法を冥うんとせゝものも職業を替んと思ひ人も些ゞ

鬼へ肩と入れうけ賣買かるく成ふるさうひ儲い益
盛んれる故儲しものい友と進め煮きりうゑて居さ
ものも出さてを出しそうて出るふ思つさうも
利益の多きふとうや彼極しん居らもぬとろこと捕
川の女房もどき儲けし人の後追うけても雲霞る
浮さるしと初ふ誘りて居さ人まで籠引き
下げて出歩行うけまぐ何がう儲けの有る
彼の生活を失ひさる人のるふい天ようしを一時乃

凌ぎ何やうる人がそうてもつひ出来る家業を下し玉
鬼の弊を極さるとろるまど隣りの騒ぎの全盛ふ
引入らまて活業ある人も徐々かさうらう斯る儲
けを除所ふのさ見るも鬼とをとらぐし足ふ任せさ
駈走りうり終ふ自已ガ持ち人の商賣い脇へ方げ
島田挑ふ附しその間も寒さふあらぬ襟巻や夜
具の紗羅紗の目ふつきて眠りかるい何るぞ爰ふ
一ツの話しあり出菅おひさる濃沼の汀ふ白鷺一羽

下りて閑静なる水底をうかびあるき鮒半日辛しとやうやく一尾の小鮒を咥へ帰り喜悦ことを食んとするに我が咥へたる鮒よりも遙に大いなる鮒水中に見るを以て周章咥へ鮒とすて是とて今日の獲ものをもてなんとあるに我が吻を逃れたる鮒逃げけゞ水中の大なる鮒も見えずなりぬ爰に於て驚いまどめて水に見えたる大なる鮒の咥へ鮒の影なると知り果てて

上へ揚たる足の躍べきことをも知らぬなり嗚呼我をあるに慾ばり折角とらへ鮒に逃られ半日の骨折とお影でちよろ多ふして腹空しく成りぬけり是い如何せん何とせうと我が持まえの鰍よりぞんざ躍で悔しとるん然まどひしこの如くこうに捕えたる我が持まえの家業とすて浮たる大いなるりうけをんとすまど汀の鷺の如く腹を空すに至るべし総て農工商の職業も

獨り自己の為のみならず国への勤めとして農を耕し人の食とつくり工い家居衣服器械とはくり人の便ふそる人商いとと鬻ぎて人をして物ふ差つ人をうらーむ故ふ農工商の道い国ふ缺へうざる所あり若し兎と賣もまさ商とらども是い拒商ふーて実勢の商ふおらず故ふ国の為ふ本業ある人いかくそうの弊弄ふ伺ふべー持ち人の職業を修所ふーて是とあすとも

一時の流行らくぶく年月とや保うん兎やうやく廃るふおよび長耳も襟きも何ふるらん仮令そそまぐふ少しの儲いつるとも商い得意と失るひ工い腕茂鈍らせ且身と惜ぶくふ持くずぜい再らび本業ふかくると厭ひ終あい拒民ふひとき境衆ふおち入り浮雲の賤るぐく保さず若し身貧さうふ至るふおよぶく主人いともあると其家族の人々い兎やえふ可惜家産とうーるひ今の憂き目と見るとよ兎

をまぶ斯貪ぐるゐい成るまでりのとと愛ゐかいと
我ぐ名と出〜罪るき僕らが黨とと怨こ思ちん
と必定るり是僕ぐ深く歎そくするところ実ゐ人
の惑ひゐあらずや故ゐ産と失ひ〜人のるゐ僕
らぐ同寮らさ〜ろ勲功ある似〜ほど産ある人
のるゐ〜ろ〜ゐ少し〜害とまるくと思る何れ
と取りらぐとと捨んやゐ能ゐ智ゐ〜て偶然重
き用ひと倩まぶかる雑戔の身ゐ振りさ〜

今さろ才の薄きと歎くも更ゐその徐るるべ〜まる君
の如き僕らぐ輩まろ少〜く量簡あるとゐて却つて
人の憎ゐとまるくその訳い君ぐ〜〜腹太鼓夜ふけ
人まづまりて後らぐづゐ女子供の魂魄と寒ろ〜〜
むるゐ足るとゐ〜ども銃軍の先ゐすゑ楽隊の陣
太鼓あるひい神ぐろの囃子とも奏すを能まぶ門
万歳の鼓ゐも劣るべくまぶく雨の夜月おかろる
時ゐ乗ぐ足越ゑ道とるろく憶病りのと怨怖せ

しむるこい知るべども芝居
凡世物の小屋の怪談う
やとさと口上ふまくびひ
変化自在とるすを出来
わい吹矢のか化ものも
ゆるず貴身り性の者
あらぐ銃軍ふ大隊の太
鼓とも打べく芝居観場一

亞化自在とも尽すべし夫こそ人間貴身とと
海陸軍の陣営ういい貴身と太鼓の教師ふた
べく芝居凡世物の金主ういい貴身と狂けんの座頭
と崇むべし鸚鵡ものふ声色つふも人鳥中の藝
とるす貴身り人の前ふおいて太鼓の曲うち入
道の早かたりるどするを有らば墺地利ふ今年あ
る博覧會へ出るとも是ふ勝るる珍物あらんや
実ふ獣中のまふ人黄金の山とつと貴身と

招待らさすべし然るを貴身ゞ藝術い忍んで行ひ
竊ふそる彼の佞人の佞悪とゝろむふ似るると
以て人自うら貴身をゆくむ僕らゞ輩い公然と
愚をあらはして繕ろそずとの故ふ人愛す仮令ば
童子へ教訓のさとし話しめちゝ山ふも貴身い悪
方僕い実方木ふて造るるの船と土の船ふる
差別あり狸汁ふい老父の眉を去いめさすべく
鬼の吸物ふい貴人の舌うちも冥るべし貴身ゞ藝

も竊うふるるときい人とゝぶらうすふ當り公然ふ用
ゆるときい人の慰ことるる人とおどうて身の楽しこ
とるさんとう寧人と慰めて身の愛を請りもる
ふい如ざるべし夜ふ乗ど垣を越て鶏とぬすこ或
ひい畑の瓜茄子るどを荒すの暴とつしこゝ人鳶
の油揚とさらふい追剥の所業るどゞ公然ふすると
以て人さのこ是を憎まずゝ鳥の種とそぎるい竊ふ
すると以て人をゞゝ疎むふあらずや如何ふ狸先

生るふとろ思ふと詰りうけまゞ狸い胯の陰嚢より
面と脹らゝ言るゆゝ大隊調練の太鼓とうち芝居
見世りのふ変化と尽さゞ人の為人の慰ことゝ成る
べけまど人ふ役せらを自已ゞ自由と得ざるべ
豈この辛き浮世ふありて他の為不為とおもらん
や我音曲ふあそんぐと思へゞ太鼓と叩き我所作
ふとゆんとろせゞ入道とする勤めて人ふ楽ト
ませんより人と驚して我を楽しまんとそ楽しと

山の図

るを兎い兎の性あり狸を
狸の性あり木の性を以て
竹の性を論ずるとも亦ふ
道理を聞まんや抑世界
の物ゝ一ゝ私の品々
し我朝ふゝ伊弉諾伊弉
冊尊国土山川草木および
群神蒼生を化生しさ

ふ時僕らら輩まで拵へまひ西洋ふくい天帝
六日ふして是とつる其時貴身ら黨い耳ふく
足長くはくら我ら輩い陰嚢大きく腹ふくまて
出で来しるり耳長きも陰嚢大いるも今さら
らふせん心とらくども亦ふるじ鬼いうさぎの心ふ
出来狸いこねきの心ふ出来おやけふ物を行ふ
ふも竊ふ事をなすも清えし性を守るのこ豈
まくこふ天帝の骨折くまひ給りのを変ずる
の理あらんや貴身らら輩い三五夜中ふやとい月
宮殿ふ餅いはくべし異見ぐまさ議論かく
まら痛しこ口いやまうこ口ぞまき可惜歯の根へ
風をかよませいよく他まり躍りの楽屋を見ぬまを
くまふると嘲こ笑えび兎い猶疑をつくろひ耳振
りくて実ふ言ままく日本の万物い伊弉諾伊弉冊
尊のくまりのふして二柱の御神ようそる西洋の
万物い天帝六日の間ふ作るの急拵らくるを以て

象に附べき陰嚢と狸に附け野猪に附べき耳と
兎に附るなどの間違ひなしとも言がたからんそのの
故い天帝「イウと言ふ男「アダムと言ふ女を拵え
との二人と人間の種とを追々人を殖させふ皆
志の邪曲なる者のを出来本性ならぬを以て火に
焼水に漂いして殺し其中に只「ノアとらふ者の
一族のを出来ときふ因り助けらをとり今の西洋
の人とちい皆「ノアの一族の後裔のを云へり上帝

の細工とらくとも仕そんじ有るとこそ折角出来く人
間を潰しふいあるなと然ともども形体の出来そと
るいえ足くまくのを故その保ふしくかきちの出来
そとるいえ他の害とあるすと以て潰しふるい水に
没らせらを火に焼まく人間と僕らが耳貴身ら
陰嚢ふく知るべし蓋人間の外の生物い心あく
とらくども智量足らざまとべ大いなる害とあるし得ぬ
と以て天帝とをと罪せず若し我が獣類の中に

世上の不為となすものの有まじ人とーて罪せーむい
我朝頼朝の富士のまき狩徳川氏小金が原の鹿狩
のごとし是ものうまき形体も心も天より授るものふ
しー各私するを能わずとらんども形体も心も受えて
後ふ是をつくるい其国々の風俗其人々の量簡ふや有ら
ん眉毛を落ー歯を染るい皇国の婦人の風俗耳掄
腕掄い西洋の女子の作り若ー天より受えー形体
と其侭ふ保ちんふい髪も短く切らざるべく爪も伸

しく長うへー裸体ぐ生るまじ裸体ぐ暮すが當然う
顔の痣と隠さんとて頬と赤く塗まい他の女も赤く塗
う夜食のかまうふく脹まー服とんせまーと大きな
る袴とをけば懐姙ぐるい女も皆大いなる袴とをけ
時の流行ふく時の流行い則ち国の風俗天より請ー
身体の上つろひとなるふ非ずや然まども身体ぐ
只ぐまぐのみなるまど心い甚ぐ物多ればい種々ふ
まと入を作るを狂植木屋の松のごー天より請得

西洋婦人の図

一学問の肥しも及ばずながらひ十露盤縫針仕事の稽古とて却つて天に背くべし然るに間と費やし物とうけ勉強困苦して覚ゆる天うけ得しまゝ人間とても僕らに黨する類する故皆骨

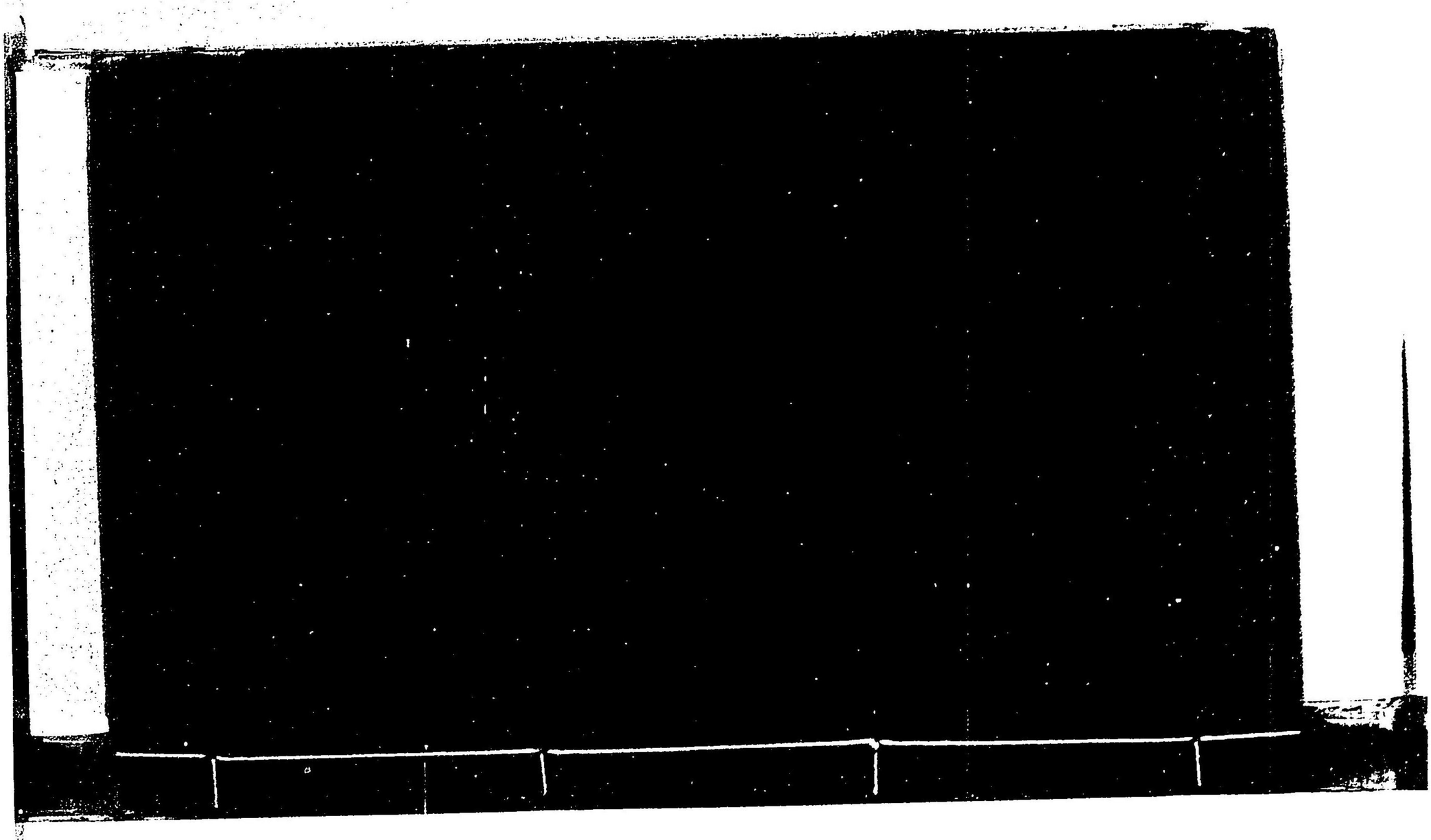
を折そもゝの修行をし益怜悧うんと欲す是ふよく僕らもまゝ学問なさんと思へども性愚鈍にして能いねど愚を守るを以て勉とるす然るに貴身が黨いまゝ人も言るごとく服太鼓の音曲あり七変化の所作ありあり鶏を盗み空寐入りの名誉など人の皆知る処なり猿も教ふ人して芝居をなし犬も学べば人のなるる形体も心も天より請ける物なれど文に入り武に去こゝ農工商の道ふよりて是を作るい銘々の思ふ処

ふ任するの豈請えるる性るうとそ其仏かくの理あるべき夫とも外ふ妙論の有らべ聞んと詰かけまべ返答出来ずや奥の手の搏うと其処へ狸寐入り虚卧息してどうくうまべ然もそあらめと髭と拉鬼い狐も照りまさる月ふうそぶき唄うて曰「うゥさぎうさぎ何見て躍る十五夜お月さまを見て躍るぴょん〳〵

月下問答 終

三都書林

大阪心斎橋通久宝寺町 伊丹屋善兵衛
同 通堂町目 敷賀屋九兵衛
西京寺町通松原下ル 勝村治右衛門
東京日本橋通堂町目 須原屋茂兵衛
同 同 二町目 山城屋佐兵衛
同 同 小林新兵衛
同 浅草茅町二丁目 須原屋伊八
同 芝神明前 岡田屋嘉七
同 同 和泉屋吉兵衛
同 同 和泉屋市兵衛
同 酒國横山町三丁目 和泉屋金右衛門
同 同 壹丁目 出雲寺萬次郎
同 馬喰町二丁目 森屋治兵衛



特41
119

091815-000-4

特41-119

兎狸月下問答

爪生　政和／述

［刊年不明］

DBO-0332

特41
119
東京府書籍館
TOKIOFU
新門
七部
三類
丑酉
十棚
二〇五九号

閲覧